

神農廟造営と東洋学園創立者・宇田尚

東洋学園資料室学芸員

永藤欣久

神農は中国の古典籍で医薬の始祖とされる。湯島聖堂に安置される神農像の来歴は研究者、斯文会（聖堂）による調査によって知ることができる。それによれば近世は湯島聖堂や医学館にあった像は維新後、新政府に接收され、農商務省博物局に陳列されていた。これを憂いた医師浅田宗伯が像を引き取り（故に恩賜神農像と称する）、弟子の木村博昭が引き継いだ。木村家の後継者が1942（昭和17）年に軍医として召集されると、戦局苛烈な折から元の廟所に戻すこととなり、翌年150年ぶりに聖堂に遷座した。

斯文会で受け入れにあたった担当理事が歯科関係者であったことは知られていない。それが東洋女子歯科医学専門学校々長・宇田尚である。民生用物資が極度に欠乏した戦時中に、宇田尚は私財を投じて神農像を安置する廟を献堂した。

宇田尚の父、宇田廉平は海保漁村、芳野金陵に学んだ漢学者であり、武蔵国六浦藩大参事として新政府集議院徴士となって国事にあたったが、政府中央と対立して弾圧され、栃木県上都賀郡永野村の山中に落ち、農耕生活を経て明治20年代に旧制第一高等中学校（後に第一高等学校）倫理学教授、陸軍幼年学校教授となった。

宇田尚は四男として栃木の山中に埋もれるべきところ、日露戦争の軍功を契機として実業界に進んだ。その経済力と漢学の素養を以て女子歯科医専を経営し、永野村の屋敷と山林「槃澗学寮」を維持した。学寮（現東洋学園栃木寮）は1930（昭和5）年の宇田尚による改築後は今日まで大きな変化がなく、それ自体史跡であり収蔵庫である。

学寮に残された資料を通じ、神農廟を造営した宇田尚とその父の事績を辿る。